

友の会だより 6号

友の会世界遺産企画

平泉と奥六郡の旅

鍵 山 充 尚

今回の旅は、参加者 11 名で、2011 年 10 月 23 日（日）から 25 日（火）までの 2 泊 3 日である。

訪れた平泉・奥六郡（現在の岩手県奥州市から盛岡市にかけての地域）では、多くの史跡が一行を迎えてくれ、興味の尽きない旅となった。奥州藤原氏・清衡時代に奥大道（白川関から陸奥湾の外が浜までの東北縦貫道路）が整備、開発され、東北地方は国際化していくが、平泉はその中心である。平泉町の中尊寺（特別史跡）・毛越寺（特別史跡・特別名勝）・観自在王院跡（特別史跡・名勝）・無量光院跡（特別史跡）・金鶏山（史跡）は、今年、『平泉－仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群』として世界文化遺産（記

念工作物・遺跡）に登録された。仏堂を造り、池泉・樹林・金鶏山頂とリンクした庭園は、一体となって仏国土（浄土）を象徴的に表現したものである。文化遺産登録の機会に再度、歴史探訪できたことは、意義深いものがあった。

（第 1 日目）

中世荘園を視覚的に体験

——骨寺村荘園遺跡

JR 一関西口に集合した一行は、駅を出た途端から大槻三賢人（玄沢「蘭学階梯」：盤溪「近古史談」：文彦「言海」）の像に迎えられた。研修の講師とドライバーは小澤拓美先生に担当していただいた。早速、レンタカーに乗り込むと、講師から 24 頁に及ぶ「研修

主な紙面

平泉と奥六郡の旅	1
奥州藤原氏 見方の違う歴史	6
多摩新選組のふるさとをたどる	9
全歴研宮崎大会報告	11
牛込林一族墓から四ッ谷お岩稲荷	〜 12
中国江南の旅	13
古代中世の芸能女性の変遷	14
第 6 回総会報告	16



駒形根神社から荘園跡を望む



テキスト」が配布された。芭蕉二夜庵の碑を車中より確認後、平泉の西方約15kmの小盆地にある骨寺村荘園遺跡（平泉世界遺産のコア・ゾーンのひとつ、”拡張”による世界遺産登録をめざす。）に向かう。

天気は、午前雨、午後から曇り・雷注意報ありの予報である。普段の行いが良い(?)のためか、雨なしで雲の切れ間から須川岳（岩手県側では須川岳、秋田県側では大日岳、宮城県側では栗駒山）が微笑むように一行を迎えた。磐井川（荘園の南境）を確認して荘園跡に入る。

骨寺村荘園は、中尊寺の経蔵別当の所領であった。『吾妻鏡』に村の四方の境が示されていて、それがそのまま、現在も残されている。中尊寺には、「陸奥国骨寺村絵図」が遺されており、「在家絵図」（詳細絵図）と「神仏絵図」（簡略絵図）という二枚の古地図が示されている。中世の村の姿を視覚的に体験することができた。山々に囲まれた地は、ほ条整理がされていないため、曲がりくねった水路や不整形な水田が広がる。点在するイグネに守られた家々、要所にある神社や小さな祠等、伝統的な農村の景観が維持されていて、代表的な日本の原風景として注目を集めている（「重要文化的景観」に指定〈文化財保護法〉）。

一行は車を降り、駒形根神社から荘園跡を見下ろした。神社は須川岳の奥宮を拝むように西向きに建てられている。地元の佐藤さん（ガイド）に説明をいただき、土のあぜ道等、荘園跡地と一緒に歩く。遠西遺跡付近からは12、3世紀の土器類が発見されているとのこと。この荘園遺跡は、2005年に国の史跡に指定され、荘園遺跡を構成す

る山王窟、駒形根神社、若神子社、遠西遺跡等も保護が図られることとなった。

時間制約の中、「友の会」研修らしく、「次はもう来られないかも」と講師を拝み倒して、山王窟（荘園の西境）を追加し、仰ぎ見られる地まで足を伸ばしていただいた。若神子亭で

「南部一郎くかぼちゃうどん」の昼食。

午後は、坂上田村麻呂が戦勝記念として創建したとされる達谷窟（たっこくのいわや、p8写真）へ。岩に守られた毘沙門堂、岸壁に刻まれた磨崖仏を後にして毛越寺へ。



今年、世界文化遺産に登録された為か、観光客も多かった。参加者の多くは、何十年ぶりに訪れたという。広大な境内に、大泉が池を中心に、かつて金堂円隆寺、嘉祥寺、講堂、経楼、南大門等の堂舎がならび、遣水が流れる浄土庭園であったであろうことに改めて思いを巡らした。

その後、北上川に面した丘陵、高館を訪れる。衣川や義経堂から東に見える束稲山を見ると、「先高館にのぼれば…(芭蕉)」の情景そのものがある。眼下に広がる夏草が風に揺れ光る様を眺め、芭蕉が奥州藤原氏の栄華や義経終焉の地を思っ詠んだ句碑に誘われて一行も、芭蕉の追体験をする。

高館を後にして、無量光院跡へ。藤原秀衡が宇治平等院鳳凰堂を模して建立したと伝えられる寺院跡である。現在は池跡、中島、礎石を残すのみであるが、池跡に水を張った姿はまさに浄土の世

界をうかがわせる。次の柳之御所遺跡は、『吾妻鏡』に記されている「平泉館」（奥州藤原氏の政治・行政の拠点）と推定されている。観自在王院跡を訪れた頃は日も落ち薄暗くなり始めた。ここは、毛越寺の東に接し、基衡の妻が建立した寺院跡で、園池を中心に南側に大小の阿弥陀堂が設けられていた。近くには、今は見向きもされないであろう墓がポツンとある。講師の指摘で、阿倍宗任の娘（基衡妻）の文字（「前鎮守府將軍基衡室安倍宗任女墓」）が読みとれた。その後金鶏山入り口にある義経妻子の墓（伝）に立ち寄り宿舎（ホ



宗任の娘（基衡妻）墓

テル武蔵坊）に入る。旅の疲れを癒し、夕食後、のんびりするはずであったが、熱血講師の指導は続く。20時過ぎから40分間は、明日の予習と打合せ。宿からの「平泉の文化遺産クイズ」に応募して明日への期待を膨らませながら眠りについた。

（第2日目）

皆金色の極楽浄土をみる

——世界遺産の平泉中尊寺



岐阜県白鳥町石徹白の文字を発見

8時30分出発。まず中尊寺へ。全員がイヤホンを持つ。出発時に電池切れのトラブルもあったが直ぐ対処。講師からの解説をイヤホンで聴きながら月見坂を登る。杉木立が坂を覆っている。この坂は「奥大道」そのものである。月見坂の参道脇には諸堂が点在する。弁慶堂、薬師堂から本堂を目指す。途中、全盛期の平泉を訪れた西行が「ききも

せず 東稲山の さくら花 吉野の外に かかるべしとは」と詠んだ西行歌碑を見る。石徹白記念植樹という文字に出会う。これが「何故あるか」と講師が発問し、一行の研修意欲を刺激する（秀衡は岐阜県郡上市白鳥町石徹白の神社に虚空蔵菩薩像を寄進）。

本堂、願成就院宝塔（重文）、鐘楼を経て藤島亥治郎設計の新覆堂・金色堂へ。混雑を適度に避けつつ、講師の解説がイヤホンから流れる。持参した双眼鏡で壇上仏像群、格座間、巻柱等の螺鈿細工、蒔絵等の漆工芸、精緻な彫金を細かく見入る参加者もいる。皆金色の極楽浄土を現世に表した荘厳な平安仏教美術を確認。その後、芭蕉句碑、重文の経蔵、旧覆堂へ。さらに一般人進入禁止地にも講師が事前に特別許可を受けていて案内。釈尊院五輪塔（重文）は、風輪を欠くが在銘五輪塔として日本最古（仁安4年＝1169年）との指摘。次の白山神社能舞台（重文）は、近世の能舞台遺構としては東日本唯一のものとされ、日本の芸能史上貴重な遺構。

かんざん亭のベランダに出て衣川を望む。讃衡蔵に向かう。中尊寺ほか山内寺院の国宝・重文等、三千点超の文化財が収蔵・展示されている。重文の阿弥陀如来坐像（中尊寺蔵）、薬師如来坐像（願成就院蔵）、薬師如来坐像（金色院蔵）、木造3体の巨像を拝観。紺紙金銀字交書一切経、金字宝塔曼荼羅図等の展示を見る。

館外に出て、観光客は通らない横の坂を下る。観音院から大池伽藍の跡に出る。浄土庭園に思いを馳せる。片隅の小池では、奥州藤原時代の種子から育てた古代ハス（「中尊寺蓮」）を栽培していたが、花は終わっていた。種子は、昭和25年の金色堂調査で、秀衡の棺にあった「首桶」（調査によって泰衡の首級と判明）から大賀一が採取し、氏の没後、埋もれた資料の中から再発見されて賛衡蔵に保存されていた。播種育成を依頼され、平成10年にやっと開花発表できたという。

程なく平泉レストハウスに着き昼食を済ませ、安倍氏造営の寺院と考えられている長者ヶ原廃寺へ。100㎡四方の跡地が昭和33年に発掘された。つ



いで安倍頼時八男、白鳥八郎則任の館跡（伝）といわれる白鳥館へ。参加者の要望を受け、奥の正法寺に立ち寄り車中見学する。

次の黒石寺は、「蘇民祭」が、男性的壯観の奇祭として知られ、貴重な民俗遺産として古代の祭りの姿を今に伝えている。ここでも、講師が寺に事前連絡をとっており、住職は不在であったが、セコムの警備解除がされていて、特別に自由見学をさせていただくことができた。収蔵庫や本堂に入る。置いてある写真集を買い求める参加者も少なくなかった。国指定重要文化財の薬師如来坐像、伝 慈覚大師坐像や岩手県指定文化財で、基衡の寄進とされる月光菩薩・日光菩薩像等を拝観できた。丁度、大手観光会社の旅行団に出会ったが、境内を見て帰るだけであった。本研修旅行と雲泥の差であった。

15時少し前、黒石寺を離れ、胆沢城資料館を訪れる。胆沢城跡を車で一周し、その広さを実感。夕暮れが近づく中、鳥海柵（とのみのさく）遺跡に向かう。安倍氏が前九年合戦で築いた柵（2009年、岩手県金ケ崎町教委発表）である。堀や柵の遺構が軍事的構造であることがわかる。直ぐ横を東北自動車道が走っていた。

2日目の見学予定を全て終了し、宿泊先の鉛温泉、藤三旅館に向かう。白猿の湯は、天然の岩をくりぬいた湯船で、底から源泉が湧きだしている。他にもいくつかの湯があり、源泉掛け流し100%の秘湯にのんびりと浸かり旅の疲れをとった。夕食時、どぶろく特区ということで、どぶろくを堪能した者もいた。

（第3日目）

古代城柵の威容を復元

——胆沢城・徳丹城・志波城

ハードスケジュールの割には、皆、疲れも見せず、元気な様子。宿舎を予定通り出発。まず、五郎沼に行く。沼は小さく、平泉・藤原氏初代清衡の孫、樋爪太郎俊衡が建立した樋爪館跡の南にある。冬は白鳥が飛来するという。駐車場隣には、中尊寺蓮の蓮池がある。一行の某氏が種がないかと覗いたが、もぬけの殻だった。

ついで陣が岡へ。ここは、前九年合戦で源頼義・義家親子が陣を敷いたことからこの地名があるという。蝦夷を攻めた坂上田村麻呂の宿营地でもあ



陣が岡は鬼気迫る戦歴跡だった

る。志波城を築く時に軍勢や人夫一万有余人が宿営したという。志波城が完成した時、その成功を感謝し、戦勝を祈願して建立したとされる蜂神社が頂上にある。そこから見下ろすと、この地にそれ程多くの人が宿営できたのかと思いを馳せる。

一行は徳丹城跡を経て、志波城跡へ。到着時は、傘がなくてもよい程度のごく僅かな雨模様であった。坂上田村麻呂により、延暦 22（803）年に造営された最北端・最大級の城柵である。ここは前九年合戦時の源氏の陣の跡とされていた太田方八丁遺跡であるが、昭和 51・52 年の東北自動車道建設にともなう発掘調査以降、それまで所在地不明だった志波城跡と判明した。昭和 59 年に国の史跡

指定を受け、現在も調査と保存整備が進行中である。かつての威容を復元した様は圧巻である。

正門となる外郭門は、桁行 15m、高さ 11m の櫓門で、復元された古代の門としては、奈良の平城宮跡朱雀門に次ぐ大規模なものである。その両側には土を固く積み上げた築地塀がある。高さ 4.5m、長さ 252m あり、復元では、全国最長である。周辺にはお店は見あたらなかったが、入り口前にわずかなテントが張られ、野菜や土産が売られていた。車に戻る際、古代米等を買って求める参加者もいた。

次に、安倍氏が築いた最北の古代城柵とされる厨川柵跡（伝）に向かう。厨川柵は安倍頼時の次男安倍貞任の拠点で、前九年合戦で源頼義らとの最終決戦場である。安倍氏はここで滅んだ。宗任、家任、則任は降伏し流刑、重任は殺された。安倍頼時の娘婿である藤原経清は斬首（「切れない刀でギコギコ（講師談）」）され、その長子清衡は母とともに清原氏に入り奥州藤原氏の祖となっている。

ここを 11 時半に出発し、盛岡市内中津川の上ノ橋へ。この橋は、慶長 14 年（1609）に第 27 代藩主南部利直が、盛岡城築城時に架けたもの。橋の欄干には、18 個の擬宝珠（国の重要美術品）が付けられている。青銅製で 1609 年（慶長 14）が 8 個、慶長 16 年が 10 個あり、銘が読みとれる。こ

れほど多く残っているのは全国的にも珍しい。一同、必死に銘を見る。一方、講師は、時間心配の顔になる。講師推奨の店（明治 40 年創業の東屋本店）に急ぐ。昼食は、期間限定、今が旬の「牡蠣」そばを求めるものが多かった。入店直後から店内は満員状況。講師が急ぐ理由が判明。食後は盛岡城址へ。城址内の烏帽子岩、啄木歌碑を見て、城下町散策となる。中の橋を渡る。川を見ると、はるか太平洋から遡上し、産卵する鮭の群れ。昔、この川で泳いだという盛岡出身の参加者も初めての光景と言う。しばし見入って、一同は感動。旧盛岡銀行（重文）は、銀行業務中だったが、客に混じり、中に入って建物視察。予定外の盛岡てがみ館にも入る。著名人の書簡（てがみ）や原稿・日記等を展示する全国でもユニークな施設であった。ほぼ全日程をこなし、講師は、旧第九十銀行（重文）内で、ティータイム提案。細かな心遣いを感じる。車は、JR 盛岡駅へ。「もりおか」と書かれた駅名の文字は啄木の書いたものと、最後の解説。駅前駐車が難しく、一行はすばやく下車。車も駅前を直ぐ離れ、講師は車回送で、一関に向かう。講師に十分なお礼の言葉も掛けられなかった。「友の会」ならではの収穫の多い研修であったことを皆が実感して解散となった。

紫波城跡にて



奥州藤原氏、見方の違う歴史

重政文三郎

緋緘の大鎧に龍頭の兜

緋緘の大鎧に龍頭の兜を身につけて、馬上颯爽と疾駆する八幡太郎義家の雄姿があった。私が少年時代、少年雑誌で強い印象を受けていまだに心に鮮やかに浮かぶそれは、私の歴史像の原型である。前九年後三年の役という華々しい戦いのお話は、現在でも多くの少年の心をとらえて離さない英雄たちの物語である。そういえば、歴史の始まりにはいつもそのような英雄たちの時代があるようだ。日本武尊や大国主命の英雄譚は古代の始まりを飾るにふさわしい。八幡太郎や源義経の物語は武家の時代といわれた中世の始まりを物語るときの英雄譚である。戦国の英雄譚が近世の国家を生み出していく。

明治維新だって例外ではない。これらのお話で英雄は、常に悪者に対峙している。桃太郎が鬼を征伐するこの図式が、歴史として語られるのである。確かに歴史は、動乱の

時代を経て政治的社会的に安定した時代に移り変わっていくのであるから、その勝者の時代を過去に投影して歴史が語られてきたことは否めない。このことを心に置いて歴史を読んでいくことはたいへん大切な観点であるといえよう。同時に大切な批判の観点でもあることを忘れてはならない。

昨年の都歴研友の会の企画は、東日本大震災で被災した東北地方へ、しかしながら世界遺産にな

るという夢の宿願を果たしたばかりの平泉へ出かけることであった。わが友の会のメンバーである小澤拓美さんをツアーガイド兼運転手としてお世話をかければなしの2泊3日の豪華旅行は、「平泉と奥六郡の旅」と銘打っておこなわれた。いうまでもなく奥州藤原氏の遺跡をたどる旅である。

私はこの旅に参加する予備知識として、高橋克彦の小説「炎立つ」全5巻を読んだ。そこに描かれた奥州藤原氏の物語は、一般にいわれるそれとは大きく違っていることに、たいへん興味を抱いた。藤原秀郷の流れをくむ藤原経清が、奥州の土豪安倍頼時の女婿となり、中央政府から派遣された源頼義と戦うという前九年役から始まり、奥州藤原三代の覇権確立を経て、源頼朝による藤原泰衡討滅に至る物語である。その間、藤原経清は



『清水寺縁起絵巻』胆沢城資料館

源氏の支援を受けた清原武貞に敗れ、その子清衡は、母（安倍氏）が敵将清原武貞の妻となるという過酷な試練を経て成長、後三年役で源義家の支援を得て清原一族を倒し、奥州に平泉を首都とする奥六郡の支配権を樹立したのである。このようにこの小説は、経清、清衡、基衡、秀衡、泰衡とつづく藤原氏の立場から、京都朝廷に対抗しつつ、中央で台頭する武家勢力と渡り合いながら、1世

紀にわたって戦争のない奥州世界を維持した歴史を描くのである。この小説で藤原泰衡は、頼朝からかくまった源義経を逃がし、北上してくる頼朝軍に対して平泉を戦場としないために平泉を捨てて北に逃げるという行動をとっている。炎上を避けるためであった。

坂上田村麻呂の蝦夷征討

歴史が、誰の立場に立って書かれるか、はなはだ興味深い。今回の奥六郡の旅で考えたこともそれであった。坂上田村麻呂が蝦夷征討によって建てられた胆沢城のあとに資料館があり、そこに『清水寺縁起絵巻』(土佐光信筆、室町中期、P 6 写真)が大きく拡大して懸かっていた。その絵を指して学芸員の方が、「見てください、かっこいい騎馬武者に対して、追われている蝦夷はみすばらしい小鬼のような姿に描かれています。」と説明された。この絵巻は、坂上田村麻呂が本尊千手観音と毘沙門天に祈願して蝦夷征伐に出かけ、凱旋のあと仏殿を奉納したという清水寺の縁起が説かれている。奥州の現地に、征服者側の歴史観による展示があることに、私はいささか違和感を覚えた。胆沢城という征服のシンボルの発掘現場であるから、胆沢城の立場で書かれることは当然かもしれないが、ここは奥州である。ただ、この資料館では、田村麻呂軍に対して再三にわたって反抗したアテルイ(阿弖流為)など蝦夷の首長たちの戦いが語られ、当時の蝦夷の生活の様子も紹介されている。

阿弖流為という人物はたぶん伝説上の人物ではあるが、遺跡としては平泉に近い達谷窟(たつこくのいわや)がある。その入口右手に説明板が立っていた。「約そ千二百年の昔、悪路王、赤頭、高丸等の蝦夷がこの窟に塞を構え、良民を苦しめ女子供を掠める等乱暴な振舞が多く、国府もこれを抑える事が出来なくなった」と書き始め、桓武天皇が坂上田村麻呂を征夷大將軍に命じ蝦夷征伐の勅を下されたこと、対する悪路王等は達谷窟より三千余の「賊徒」を率いて抵抗したが、「武威を恐れ」て窟に籠もって守りを固めた」こと、そし

達谷窟



て田村麻呂將軍は激戦の末に打ち破ったことが書かれている。「悪路王」とは阿弖流為のことだといわれる。この洞窟こそ田村麻呂軍に抵抗した阿弖流為たち(悪路王、赤頭、高丸などの名があげられる)の立て籠もった拠点であり、そこを征服した田村麻呂がここに毘沙門堂を建てたのである。陸奥の清水寺ともいわれるように、京都の清水に似た高い舞台づくりである。先の説明板の書き方からもわかるように、この遺跡は坂上田村麻呂の戦勝遺跡なのである。しかし、ここに悪路王たち蝦夷の抵抗の遺跡を読み取ることもまた、地域の歴史遺跡の見方ではないだろうか。

骨寺遺跡は中尊寺の故地か

私たちの旅は、一関市の骨寺村荘園遺跡の見学から始まった。達谷窟は、骨寺遺跡から平泉中尊寺へ向かう中間にあった。時間関係が逆になるが、次に骨寺遺跡について触れておきたい。

骨寺村荘園遺跡とはまた変な名前であるが、現在は本寺という村名であった。平泉から西へ車で約30分、有名な巖美溪のその奥に、南を磐井川で限り、北の山並み、西の山王山、東の鎔懸(かぎかけ)で区切られた盆地のような地形の村である。中世の荘園の姿がそのままに保存されている重要文化的景観とされている。中尊寺の経蔵別当の所領だった。現地ボランティアガイドさんの説明によれば、田んぼの形も数もそっくり昔のとおりに残してあるとのこと。しかもその遺跡の田んぼを、機械力を入れることもなく耕して生活を維持しているという。ガイドさんは小声で言った。

「だから私たちは文化庁の言うとおりにしなければいけないのです」と。遺跡に生活するのはたいへんな苦労があるに違いない。

昼食の時入った食堂で、観光パンフや関連書籍と一緒に、『骨寺の時代』と題された一冊の小冊子を買った。骨寺遺跡について詳しい説明書だと思ったのだが、あとで読んでみるとその書は、佐藤光男氏という地元の郷土史家が長い時間をかけてこつこつと研究を重ねてきたもので、現在の荘園遺跡案内書とは全く違った角度から書かれていることがわかって驚いた。この書の副題は「骨寺の時代 — 奥六郡の王、安倍頼良は、骨寺の地に、平泉を造った」となっている。この地は「平泉野」とも呼ばれ、平泉が出来る以前の平泉の地で、中尊寺もここにあったのだという。しかもそれは安倍頼良の時代から清原武則、藤原清衡の時代にかけてである。このことは江戸時代の地理書『安永風土記』にも、「当郡平泉村の旧跡」であること、「大日山中尊寺」がこの地にあったこと、中尊寺も毛越寺もここから平泉村へ移されたこと、などが記されていて、後の「関山中尊寺」とは区別した名前が出ている。

大日山中尊寺をこの地に造ったのは清原武則であった。骨寺村の荘園絵図は現在の中尊寺大長寿院に保存されている。その「在家絵図」と呼ばれる図面には、骨寺堂跡と書かれて小さな四角を4×3個並べた、如何にも建物跡を示すかのような印が書き込まれている。ここが大日山中尊寺跡であったかどうかは、現在発掘調査されているが確証は出ていない、と現地ガイドの佐藤さんは言っていた。この絵図には柱穴跡のような印がもう一つあり、そこには「ミタチアト」または「ミタケアト」と読める文字がある。「チ」か「ケ」か、「ミ

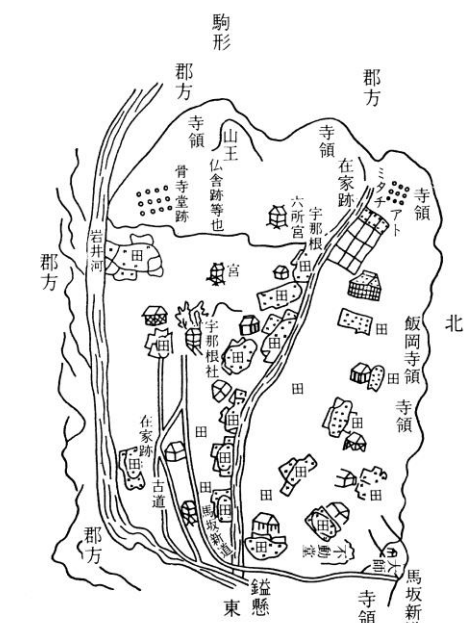
タチ」と読めばここが清原氏または安倍氏の「御館」だったと考えられるのである。明治33年刊の吉田東伍『大日本地名辞書』の「骨寺」の項に、「後に清衡に至り此骨寺及び僧坊をも平泉に遷し……」とあり、平泉移転説が述べられている。

ところが、現在の骨寺村荘園遺跡のどの説明パンフレットにも、骨寺村が中尊寺や毛越寺の故地であり、平泉移転前の聖地であったことは書かれていない。何故であろうか。

『吾妻鏡』では骨寺村は詳しく書かれていて、源頼朝が藤原泰衡を降したあと、いち早く骨寺村の実状を中尊寺経蔵別当の大法師心蓮に報告（寺塔已下注文）させた。心蓮が「合戦のために村の住民等は恐れをなして逃亡したので早く安堵してほしい」と述べたので、頼朝は中尊寺など平泉内の寺領については諸役免除の文書を下し、地頭等が妨害を働いてはならないとして所領権を安堵した。泰

衡がいちはやく平泉を放棄して北に逃げたことによって、平泉は戦火にさらされることなく、その寺院は寺領ともどもみごとに保存されたのである。しかし、中尊寺からの報告書には骨寺村が故地であったことは書かれていない。

ここで旅の印象記として敢えてうがった推測を述べるなら、『陸奥話記』にしても『吾妻鏡』にしても、徹底して源氏の立場から書かれた歴史であるから、安倍氏や清原氏そして奥州藤原氏など蝦夷の立場は軽視されたのではなかろうか。中尊寺の故地が骨寺村であったことはたいして問題ではなかった。それよりも、衣川以南に安倍氏や清原氏の遺跡があったこと自体、衣川を以て蝦夷と朝廷勢力の境界としていた歴史の修正を迫られるのではなかったか。全く論拠はないのだが、このたびの旅をとおしての感想もしくは夢想であった。



骨寺荘園絵図 高橋富雄『奥州藤原氏その光と影』から

「多摩新選組のふるさとをたどる」に参加して

都歴研秋季史跡見学会

友の会会員 吉田寛治

秋季史跡見学会に参加した感想を、「友の会だより」に寄稿するよう小沢拓美先生より求められたときの驚きは未だ忘れられません。そもそも歴史教育とは全く異なる分野で私学の教員を勤め上げましたが、同じく異分野で都立高校を定年退職した妻が縁あって当会に入会を勧められた折におまけで一緒に入会させていただき、健康のためのウォーキングと旅行を目的として国内外の史跡見学会に参加させていただいているお気軽会員のつもりだったので。勿論当然のこととして強く辞退申し上げたのですが、結局小沢拓美先生の「すべて自由です」というお言葉に甘えて身の程を忘れ引き受けてしまって後悔しながら作業した次第です。

新選組支援者の末裔の方々

春秋の見学会や海外研修参加は専門性に溢れた同行の先生方の知的好奇心に大いに刺激され、お話を伺いながら巡る楽しい年中行事になっています。今回も去る11月3日に催された表題をテーマにした見学会に参加しました。

爽やかに晴れわたったこの日、京王線調布駅南口から21名の現役の先生方や友の会会員など総勢29名がバスに乗車。車を進めながら島津先生の進行で参加者顔合わせの簡単な自己紹介に続いて、集合時に配布いただいた当日の資料集に目を通しながら、講師兼ご案内をお引き受け下さった小島資料館館長小島政孝先生からこの日の行程について概略をお話いただきました。毎回いただくこの資料集も門外漢の私には大きな楽しみの一つで、その後興味に任せて一寸調べては書き込みをして大事に保管しております。

10月に届いた案内文中にあった小島資料館に

ついて全く知識のない私は当館のサイトを検索しました。それによると小島家は武州多摩郡小野路村で幕末期に寄場名主を務めておられた名家であり、第20代小島鹿之助が当主の時代、地域における天然理心流の稽古場を提供して近藤勇、土方歳三、沖田総司、山南啓介らと盛んに交流し、近藤勇らが浪士隊に入隊した当初からの書簡を交信し、物心に亘る支援をし続け、小島家は代々その膨大な文物を管理・保存しており、この見学会の講師である第24代当主になる小島政孝氏はその書簡を更に整理解読し、研究成果を小島資料館の出版事業として発表している方であることなどを知り、これらを予備知識として見学会に臨みました。近藤勇、土方歳三、沖田総司ら新選組の強力な支援者であった小島鹿之助の末裔である小島政孝氏のご同行ということで、小説や映画、TVドラマの世界からの時空を超えて質量を備えて現れる上質な映画か芝居でも見に行くような気分でした。この日小島資料館は行程の最終訪問地に設定されていました。当日の行程は次の通りです。

新選組に浸った一日

【行程】(午前)調布駅南口(8:00)→(バス)→近藤勇生家跡・近藤神社→(徒歩)→援雲館→(徒歩)→龍源寺→(バス)→大国魂神社(車窓見学)→(バス)→とうかん森→(徒歩)→石田寺→(徒歩)→土方歳三記念館→(バス)→高幡不動
(午後)高幡不動→(バス)→日野宿本陣→(徒歩)→佐藤彦五郎新撰組資料館→(徒歩)→宝泉寺→(徒歩)→新撰組のふるさと記念館→(バス)→小島資料館→(バス)→京王多摩センター→豊田駅

文字通りどっぷり新選組に浸かった一日でした。入手した個々の見学地のパンフレットや新選組の

中心人物たちを世に送り出した末裔の方々のお話から、彼らに対する強い誇りと愛情と畏敬の念をもって、まるで私たちが身近な故人を思うように、未だにその方々の中に間違いなく存在していることがひしひしと伝わってきました。新選組を立ち上げ、疾走するように生涯を駆け抜けた近藤勇、土方歳三、井上源三郎らが生まれ育ち、沖田総司、山南啓らを交えて闊歩し、踏み込んだ大地、吸った空気、見上げた樹木、集まっては激しく稽古し、食べて飲んで歓談し、時には幾分、否、多分に気負いをもって熱く時代や信念や抱負を語り合った家屋敷、担いだ薬箱、使った武具、残した書簡等々、彼らが間違いなく其処に居たという数々の事実が迫ってくるこの見学会が終わってみると、幕末を再学習して吟味したいことや、同時に色々な“なぜ”が沸々と湧き上がってきました。

例えば多摩は剣術が盛んで道場が多かったらしいが“なぜ”、新選組の中心メンバーは多摩出身者だったのは“なぜ”、或いはそんなことは常識、そんなことも知らないのといわれそうな多摩はそもそも何藩の領地か、八王子千人同心って何のことというような極めて基礎的な素朴な疑問から始まり、新選組ふるさと歴史館でちらっと耳にした、多摩が自由民権運動の盛んな地域であったという情報にエッ尊王攘夷運動が盛んな多摩に“なぜ”と思った違和感・新たな疑問など。

新選組をめぐる“なぜ”を追って

結局見学をきっかけに多摩が幕府直轄地であったことや半士半農の八王子千人同心の存在する地域であることを知り、近藤らの輩出にその影響は有りや無しやなどを考え、新選組が絡んだ幕末の歴史をもう一度総洗いし、近藤勇らの多摩時代の交流から新選組登場の歴史背景、活躍、消滅に至る過程をなぞることになってしまいました。

しかし私が見学地を回りながら探し求め続けた、近藤勇、土方歳三、沖田総司、井上源三郎らが時代の流れに果敢に身を投じる決断を下した心の底に何があったのか、数々のエピソードを持ち、精神的にも思想的にも影響を与えたといわれる佐藤

彦五郎・小島鹿之助という、近藤勇らが次第に死に臨むことが予想される活動を鼓舞するかのように見えるこの二人の強力な支援者の行為には、尊王攘夷思想を超えたもっと深いところで共鳴共感するものが感じられるが、それは“なぜ”なんだろうと、文献にあたったりネット(サイト)で検索したりしても納得できる答えには遂に行き当たることができませんでした。いや郷土史家あるいは歴史愛好家、歴史研究家はそれぞれに答えを見つけていそうだというべきでしょう。考えてみればそこに近藤勇らの魅力があり、想像力や創作意欲を刺激され、小説や映画やドラマが生まれるのでしょう。私も自分の答えを見つけるまで関心を持ち続けたいと考えた見学会でした。

実は密かに心の奥底で確信している答えがない訳ではないのですが、考えれば考えるほど居酒屋で口角泡を飛ばして放談しているレベルに思えてきて…。

幕末多摩の開明的な精神風土

ところでこの見学会をきっかけに集めた情報に触れているうちに、私は多摩が幕府直轄地であったことや半士半農の八王子千人同心の存在する地域であることは尊王攘夷思想が育まれた多摩の精神風土の形成と密接な関係があるのではないかと考えるに至っていました。ところが偶然“維新経済史再考—多摩「シルクロード」の人々—”という石井寛治東大名誉教授が2007年11月10日に東京経済大学の同窓会である葵友会の多摩三支部合同講演会で行った講演の原稿に若干加筆したという講演会記録に遭遇しました。

眼に飛びこんできたのは「多摩地域は攘夷思想の温床と言えるのか」という文言でした。早速夢中になって読みました。何と全く私の推察はもの見事にはじけ飛んでしまいました。

この講演で石井教授は佐藤文明著「未完の多摩共和国—新選組と民権の郷—」という書物を紹介しており、その中で多摩は「クールに、かつ対等に外国人を受け入れようとしていた。」「多摩人の多くは開明派代官・江川の影響もあって、攘夷急

進思想も抱いていなかったし、そのような暴走を危険だと感じていた」と記していると紹介しているのです。そして石井教授も“多摩の「シルクロード」とは何だったのか”というテーマで多摩と横浜を結ぶ日本の輸出生糸を運ぶ「絹の道」について生糸の取扱量・額、出荷量、生産量、製糸工場への外国資本の導入等などに経済史的考察をすすめ、佐藤文明氏と同じく、「多摩の地域は幕末から横浜と繋がりが強かったために、外国人との交流が盛んであって、攘夷精神とはもともと関係が浅かったものであり、むしろ欧米諸国との関係を積極的に深める開明的な精神が他の地域よりも強かったと言えるでしょう」と考察し、それが自由民権運動が展開していくことになる状況と繋がりがあのではないかと述べているのです。

ますます深まる“なぜ”

私は新選組ふるさと記念館で感じた違和感・疑問を探る手だてが見つかったような気がしました。そして新選組と多摩の精神風土との繋がりは打ち消されたように思いますが、であればある程なぜ近藤勇、土方歳三、沖田総司、井上源三郎らは幕末の激動に身を投じたのか、佐藤彦五郎、小島鹿之助の新選組への尽きぬ支援の根源は何かという強い疑問に、密かに心の奥底で確信している答えが再び消し難く色濃くなって頭を持ち上げてくるのです。

最後になりますが仕事から解放され興味関心の赴く儘に時間を費やすことのできる現在の境遇に、上質な刺激を注入していただける当会の見学会・研修会をこれからも楽しみにしております。

全国歴史教育研究協議会 平成 23 年度

第 52 回研究大会

宮崎大会報告

豊田岩男

全国歴史教育研究協議会、平成 23 年度、第 52 回研究大会は、JR 宮崎駅前のニューウェルシティ宮崎において、7 月 27 日（水）～28 日（木）と 29 日（金）史跡見学の 3 日間にわたって行われました。この大会は、九州高等学校歴史教育研究協議会第 36 回研究大会と共同開催という形をとり、前回は平成 10 年の第 39 回全歴研沖縄大会が、この形態をとっていました。

今大会の基本テーマは、「21 世紀の歴史教育のあり方を問うー知の伝達から知の創造へー」です。記念講演は、東京大学の加藤陽子先生により「冷戦後に必要とされる歴史とは何か」という題で行われました。各分科会の共通テーマは、第 1 分科会が「子どもが自ら解釈を築く授業を目指して」、第 2 分科会（日本史）が「地域教材を活用し、つながりを重視した歴史研究」、第 3 分科会（日本史）が「生徒が主体的に知を創造するための授業実践」、第 4 分科会（世界史）が「内容知から世界史授業を創造する」、第 5 分科会（世界史）が「方法知から世界史授業を創造する」というものでした。シンポジウム形式の第 1 分科会を除く他の 4 分科会には、各 3 人の発表者が夫々のテーマで日頃の研究成果を報告しました。第 1、第 2、第 3、第 5 分科会には、九州地域外から 1 人の発表者を交え、地域間の交流も図られていました。東京からは、石神井高校の加藤健先生が第 2 分科会で「近世前期における幕府と西北九州との関わり」という題で発表されました。加藤健先生は、平成 10 年に行われた第 39 回沖縄大会でも発表されています。

宮崎県は、ここ数年来、口蹄疫や鳥インフルエンザ、新燃岳の噴火に悩まされてきました。更に 3 月には東日本大震災が発生し、日本国中に衝撃が走りました。これ等の中での大会開催であったということです。

大会初日の段階の参加者は、251 人で、その中の 131 人が宮崎県からの参加者でした。宮崎県の先生方の結束力を示す数字ではないでしょうか。ちなみに、東京からの出席者は 20 人でした。

都歴研友の会からの参加者は、大会会長の池口先生を含めて 3 人でした。開会式に顧問として壇上にいたのは、神奈川の長田敬幸さんと私の 2 人でした。

牛込の林羅山一族の墓から 四谷のお岩稲荷へ

友の会 加 藤 直 道

10年前とほぼ同じ新都心周辺のコースで23年度見学会を実施したのは、お彼岸なのに寒さの残る3月18日であった。講師は松井吉明先生で、参加者は友の会々員8名を含め24名であった。全コースは約10キロ、見学場所は13ヶ所、講師のアカデミックな解説に啓発されるところ大であった。見学順にポイントを略記する。

- (1) 夏目漱石誕生の地は夏目坂にある。
- (2) 宗参寺（曹洞宗）には、牛込氏と山鹿素行の墓がある。大砲型の墓もあって珍しい。
- (3) 漱石山房跡は彼晩年の住居跡で、「猫塚」と呼ばれる多層塔がある。
- (4) 多聞院（真言宗）には、松井須磨子の墓と彼女と島村抱月との芸術比翼塚がある。
- (5) 浄輪寺（日蓮宗）には、関孝和の墓がある。犬や猫の墓もあって注目される。
- (6) 林家墓地は儒官林家歴代の墓地で、本家の外分家の第二林家・第三林家の墓等81基の墓碑がある。講師の詳しい説明があった。
- (7) 法身寺（臨済宗）は、江戸時代に普化宗鈴法寺（青梅にあったが維新後廃寺）の江戸番所の菩提寺となっていたので、普化宗鈴法寺関係の資料を保存している。
- (8) 全勝寺（曹洞宗）には、明和事件で刑死した山縣大弼の墓がある。
- (9) お岩稲荷田宮神社は、鶴屋南北の歌舞伎脚本「東海道四谷怪談」のモデルになった御先祖組同心田宮伊右エ門の屋敷内に祭られた稲

荷社がもとである。実際の妻お岩との夫婦仲は良く、歌舞伎とは正反対であった。斜め向かいの陽蓮寺（日蓮宗）でもお岩稲荷を祭っている。

- (10) 本性寺（日蓮宗）は、「四谷の毘沙門様」として知られ、塙保己一や松平定信の師で国学者・歌人萩原宗固の墓がある。
- (11) 須賀神社は、牛頭（ごず）天王社と稲荷社を合祀したもので、「三十六歌仙絵」が社殿に掲げられ、吉田亀五郎の鰻（こて）絵も伝えられている。
- (12) 愛染院（真言宗）には、内藤新宿の開設者高松喜六や塙保己一の墓がある。
- (13) 西念寺（浄土宗）は、服部半蔵の法名西念によるもので、家康の長男信康の菩提を弔うために作ったものである。

今年度より都立高校では、日本史必修化に向けて「江戸より東京へ」の特設科目が試行される。授業の成果を上げる為に寺社等の史跡や社会教育施設の活用が有効である。その為にもこの種の研修が必須の条件と考える。



【参考文献】 当日の葉の外に

1. 『東京の歴史散歩（中）山手』 東京都歴史教育研究会編 山川出版社刊
2. 『東京のお江戸をめぐる散歩コース50』 夢プロジェクト編 河出書房新社刊
3. 『地図で歩く東京』 都地研編 日地出版
4. 『江戸の古地図で東京を歩く本』 ロム・インターナショナル編 河出書房新社刊
5. 『東京文学散歩』 東京都高等学校国語教育研究会編 教育出版センター刊

中国 江南の旅

長江文明に日本人の源流をみる

豊田 岩男

日立製作所会長の川村隆氏が、3月5日（月）日経夕刊の「明日への話題」というコラム記事の中で、ミャンマーに旅をして、日本との文化の類似性に気づいたと書かれていました。主語述語の順序、粘り気のあるコメ、人々の生活ぶり等々。ミャンマーと日本の文化が似ている理由として、最近の学説では、黄河文明以前に稲作を行う長江文明が栄えたが、古代漢民族に追われたそのモンゴル系民族は、南はイラワジ川を下りミャンマーへ、東は朝鮮半島や日本へ流れたとしており、この学説が言うように先祖が同じだということです。

長江文明の中心、蘇州、無錫

今回、その長江文明が栄えた江南地域の中心都市である、上海、蘇州、無錫を、2月中旬の寒い時期に旅をしてきました。高速道路が発達しており、上海のホテルに連泊しながら蘇州、錦溪、無錫をバスで往復する形式の観光旅行でした。

この観光バスの窓から眺めた風景を見て、長江のデルタ地帯は湖沼が点在し水路が縦横に走る水郷地帯であることを実感しました。この江南の地に古くから存在した都市が無錫や蘇州でした。私は世界史を担当していましたが、この地を訪れて初めて、春秋時代の呉の都が初期は無錫、後期は蘇州であったことを知りました。蘇州の西、無錫の南西にある琵琶湖の3倍の広さの太湖は、最近映画化された三国時代の「赤壁の戦い」が撮影されたところです。その時に作成された映画撮影セットが映画村として保存されており、観光スポットになっていました。また、この蘇州や無錫は、隋代からの京杭大運河が通過しており、現在も、



ここから北京行きの船便が出ています。この無錫周辺には良渚遺跡があり、寧波の西には河姆渡遺跡があり、この地域が長江文明の中心地域であったことを示しています。

上海博物館の青銅器コレクション

今回の旅行は、寄せ集めの人々によるパック旅行であったため、上海博物館の見学時間は1時間40分と短く、1階の素晴らしい青銅器のコレクションを見るために、その時間の大半を使ってしまった。この青銅器以外には、2階の陶磁器、3階の書画や印章、4階の玉器や貨幣等々見るべきものが多くあり、もう一日を費やして見学する必要があると思われました。

青銅器の展示は、夏の武器と言われるものから始まり、途中にはよく歴史書に写真が出てくる越王勾践のものに似た呉王夫差の剣もありました。この上海博物館は、是非とも、再度訪れたい場所です。

古代中世の芸能女性の変遷—遊行女婦から傾城へ

講師 埼玉学園大学人間学部 服藤 早苗

女性史研究の最近の成果

講師は家族史、女性史の研究者です。現場の高校教員に多くを知ってもらおうと意欲的でした。そのため講演内容は多岐にわたり頭のなかの整理がたいへんでした。

本題に入る前に、ジェンダーについての既成観念を取り払うべく女性史研究の最近の成果を4点、紹介されました。

1) 平安貴族は「婿入り婚」であった。

結婚後は住居は別にして、屋敷のなかに妻の両親と住んでいた。したがって、舅・姑とは妻の親をさす言葉である。13世紀頃から

「嫁入り婚」になった。江戸時代頃から夫の両親と住むようになった。平安末期の宮中で側室が一緒に住んでいるようなことはありえない。テレビのドラマなどでしっかりとした時代考証がおこなわれていない。

2) 料理が男の仕事だった時代が長くあった。

古代には狩や漁は男の仕事であり捕った獲物を男が調理した。米や野菜などを栽培するのは女の仕事であり米や野菜の調理は女の仕事であった。平安時代の宮中にも男が調理をする記述があり、江戸時代でも男の調理「包丁」が武士の教養の一つであった。明治以降、富国強兵政策により男の仕事は軍役になり「調理」は女の仕事となった。江戸時代の武士の「家政書」が明治になり女学校のテキストとして使われた。

3) 平安時代の例で90歳になっても役職についていた男性もあったが、90余歳で和歌の清書をしていた女性もいた。生涯現役であり定年などなかった。

4) 紫式部は例外的に父親から漢籍を学んだが、平安時代の貴族の女性は漢籍を学ばなかった。一

人前に扱われなかったからである。万葉集では女性が名前をもっているが、古今集では「・・・の娘」のような属性として扱われ、新古今集では女性の名前はまったくつけられなくなった。国家によって掌握されるのは男性のみとなったからである。



七十一番職人歌合

本題 芸能女性から買売春の成立へ

題名は「古代・中世の芸能女性の変遷」であったが、芸能女性独自の変遷史ではなく芸能をする人としての女性から次第に売春をする女性が形成されていった過程についての歴史であった。時代別につけられた表題からその流れをつかむことができる。

- 1 古代 買売春未成立の時代
- 2 平安中期 遊女 傀儡女 歌女など芸能を主とする女性の登場
- 3 平安後期から鎌倉初期 女性の芸能の隆盛と買売春の成立
- 4 鎌倉時代 遊女などは芸能者から買売春の女性に変容

5 中世後期 買売春屋と芸能者への卑賤視観が生まれる

概略 上記の5つの時代区分について内容は以下のとおりである。

1) 古代史のなかに出てくる**遊行女婦**とは、地方国衙にて都からきた官人との宴において歌を詠む専門歌人のことであり、額田王のような立場の人である。宴のあとの性関係は当時は風習として一般的であった。

2) **遊女**とは、水辺（川の要衝など）に住み船客に推参したり京内にも出張して宴席に侍る女性をいう。共寝も行う。**傀儡**とは、街道の宿駅で今様などうたう者で共寝もおこなう女性であり東海道の青墓や赤坂に見られた。**歌女**とは、都にて貴族の席で芸能をおこない共寝もする者をいう。いずれも芸能をする女性たちであるが共寝もする。

3) 淀川の中流に江口というところに遊女がいて、そこから船に乗り込み船中にて宴会をしたり共寝をしたりした。そのような遊びをとりしきる**長者**がいた。

白拍子とは、男装した踊り手で鼓・銅拍子などの打楽器の拍子のみで謡い舞う芸能女性のことであり12世紀中頃に登場してきた。都には**白拍子奉行**があり貴族達に分配した。共寝した代償として衣装が与えられた。

源頼朝も「遊君別当」という同様の職を命じている。

院政期には芸能が発展したが、後白河法皇が遊芸文化を奨励した背景がある。**芸能者としての遊女・傀儡・白拍子の全盛期**であった。

4) 13世紀になると遊女・白拍子女・傀儡は変容し「**芸能よりも売春を主とする女性たち**」になる。**傾城**といわれる者も登場してきた。

当時は遊女・傾城を扱う長者は女性であった。鎌倉の若宮大路に面して「好色の家」あり昼間から酒宴をおこなっていたなどの例がある。

京都には「辻子の人」あり。後の「辻子君」の始まりであろう。また京都には遊里街ができてくる。地獄辻子、加世辻子など。

5) 都市が発達するにつれ買売春屋が多くできる。

客をひく辻子・立君、共寝の客をひく傾城たちが多く登場するが、足利義満の側室「高橋殿」のような傾城出身の優れた能力を持つ女性もいた。

都にいた芸能者たちが地方に出ていくことが始まるが、地方にそのような芸能者を受け入れる余裕ができたからであろう。14世紀以降、芸能女性・売春女性への蔑視が強くなっていった。

史料・資料について

講師の服藤先生はそれぞれの史実に触れるために詳細な史料を用意してくださったが、それらについて触れるスペースもなく残念である。

12世紀の地図で淀川流域に発達した遊女たちのいた場所名が示されているもの、16世紀の京都の地図で遊里、傾城屋の所在地の示されたものなど、初めて目にするものであり女性史にとっては重要な資料であろう。

『母が芸能者一覧』という資料も興味深かった。13世紀の皇族、貴族、官人などの母親が遊女、白拍子、舞女である例が何ケースもあった。12世紀～13世紀は武士勢力の台頭に抗し宮廷、貴族は文化で対抗した時代であるといえる。それが白拍子・遊女などの芸能がもてはやされた時代をつくり、母親が遊女や白拍子の皇族や公家を輩出したといえるそうである。

紹介された本など

「日本のもと」全10巻 講談社 中高学生向け
「平安朝の母と子」「平安朝の男と女」「平安朝の父と子」(新書版) 中央公論新社

歴史教育の中の女性史

「つくる会」と通称される一部のグループの古い観念で編集された「中学校日本史教科書」などの女性についての記述にも触れられた。女性史研究の成果がなかなか取り入れられず、後退さえしているのが現状であるという。

しかし、今回のような遊女とか売春(服藤先生は必ず買売春という言葉が使われるが)などの内容を歴史教育のなかに取り入れることはかなり難しいことであろう。当日の参加者には男性の教員が圧倒的に多かった。授業にどう取り入れるか

課題となったであろう。

講師の服藤先生は高校時代に「網野善彦」氏に日本史を教えていただいたとのことである。網野氏の著書に「中世の非人と遊女」があり、その影響を受けられての研究テーマであろう。とすれば、網野氏の研究を女性史研究の視点からに展開させた時にどのような変化があるのかなどが分かれば更に興味深くなるであろう。女性の立場での独自の研究視点とは何なのか、それが「被害者意識」のみを強調した視点となった場合、学会の常識になることは難しいのではないかと考える。学会の常識が形成された後に何年もかかって教科書に取り入れられるのが日本史の世界である……。

(村木 逸子)

◆第6回総会報告

◆2012年度総会は、5月26日(土)午後2時から都立石神井高校で開催されました。

増田代表世話人の挨拶に続き、鍵山世話人が議長に選出され、議事に入りました。

◆前年度事業報告では、友の会自主企画事業「奥州藤原三代の夢を追って～平泉と奥六郡の旅」のほか、全歴研、都歴研事業への友の会からの参加状況等が報告されました。

◆会計報告では、収入の部において会費納入53名で前年より1名減、寄付金は7名の方からいただいた、などの報告がありました。

◆事業計画としては、自主事業「中欧4ヵ国の旅～晩秋のオーストリア・チェコ・スロバキア・ハンガリーの4ヵ国訪問」、および日帰り史跡見学「川越」(2013年4月12日(金)予定)のほか、全歴研東京大会、全歴研海外研修旅行、都歴研史跡見学会、講演会等への参加、友の会だよりの発行、都歴研紀要の送付などが提案され了承、ついで2012年度予算案が決定しました。

◆2012年度の世話人は新しい世話人を加えて次の11名です。

増田克彦、磯山 進、小澤拓美、鍵山充尚
木村清治、黒田比佐雄、重政文三郎
多田統一、豊田岩男、村木逸子、矢島恒之

【新刊紹介】

増田克彦著 私家本

新田義貞鎌倉攻めの道を辿る

——「幻の眞慈悲寺」調査ボランティアの活動概要を添えて

14世紀前半まで、現在の日野市・京王百草園を中心とする丘陵一円に存在したと考えられる鎌倉幕府の御願寺「眞慈悲寺」調査に係わってきた5年間にわたるボランティア活動の記録を、本会代表世話人の増田克彦氏がまとめた。ボランティア仲間と歩いた稲村ヶ崎渡海を含め、高崎から鎌倉までの鎌倉街道上ノ道、これに太田市新田・尾島と鎌倉東勝寺跡を加えた紀行文である。氏の活動は、「友の会だより」2号・3号でも紹介した。

A5判209頁折り込み1枚。街道筋の写真61葉。購読のご希望は増田氏まで連絡してください。お送りします。

友の会海外研修企画

「中欧4ヵ国の旅」へのお誘い

今年の友の会海外研修企画として、晩秋のオーストリア・チェコ・スロバキア・ハンガリーの4ヵ国訪問を行います。現地では冬時間が始まる季節ですので、防寒着は必携ですが、静かな中欧らしい旅が楽しめると思います。中世ではハプスブルグの支配、近代にあつては東西対立の狭間に揺れた個性ある4ヵ国の歴史をたどります。

日 程:2012年10月30日(火)～11月6日(火)
計8日間

訪問予定地:オーストリア・チェコ・スロバキア・ハンガリー

宿 泊:ウィーン→プラハ2連泊→ブタペスト→ウィーン2連泊。

費 用:旅行代金218,000円+燃油代42,000円程度+諸費用10,000円程度